

〈在外研究報告〉

# 英 国 教 育 報 告

——在外研究を終えて——

田 中 統 治

## 英国教育報告

——在外研究を終えて——

田 中 統 治

### 1. はじめに

私は、2000年3月より2001年1月まで、イングランド東部にあるイースト・アングリア大学（UEA）の教育学部において10ヶ月間の在外研究の機会を得ることができた。この渡英は前任校も含めて計18回に及ぶ応募によって実現したものである。前任の愛知教育大学で12回目の応募によって候補者にのぼったけれども、本学への赴任によって辞退した経緯がある。50歳代を目前にした私にとってこれが最初で最後の長期滞在となることだろう。若いときでなく、この年代であるがゆえに見えてくる文化的な側面も数多くあった。研究活動は専門のカリキュラム研究を中心に行ったので、英国の教育全体に関しては系統的に情報収集したわけではない。帰国して半年後に、この原稿を依頼されたので、教育改革の動向についてもっと調べておくべきだったと後悔している。しかし、これについては、今年度の短期在外研究で渡英された窪田教授の方が詳しいので、いずれ発表される機会もあることだろう。本稿では、身辺雑記風になるけれども、私の脳裏をかすめた英国教育の風景について、トピックごとに物語るかたちで報告することにしたい。

というのも、英国の教育は今も目まぐるしく変化しており、その底流に流れている歴史的ならびに文化的な脈絡を見据えておかないと、表層的な理解に止まってしまうからである。もちろん、英国の文化に関してはすでに数多くの著作が上梓されており、また、その教育文化にみられる特徴についても教育学者による著作がみられる<sup>1)</sup>。けれども、ノーフォークの場合を中心に、こうした文献のみでは感知しがたい英国教育の断面図を描いてみることは、実感による英国教育紹介としてそれなりの意義があるだろう。そこで、ここでは、筆者にとって驚きであったケースを記憶の中から取り出してみる。その順序は、大学研究者の姿からはじめて、学校や地域の様子、そして日本への示唆の順とし、最後に資料収集に役立ちそうなウェブサイトなどを掲載したい。

### 2. 大学研究者たちの姿

#### (1) 中世の面影を残すノーリッジ市の佇まい

ノーリッジ（Norwich）は、ロンドンから約185kmの北東部、ケムブリッジから東へ110kmに位置するノーフォーク州の古都である。16世紀まではロンドンに次ぐ人口を擁していたというが、今では15万人が暮らす静かな地方都市である。道路はノーリッジ大聖堂とキャッスル博物館を中心に同心円状に二重のリングロードが走る。ここは英国風景画で有名なノーリッジ派の拠点であった。また、コールマン・マスタートドの発祥地でもある。このマスタートド会社が地元サッカーチーム、カナリークラブを後援しており、チームカラーはカナリアの黄色である。二部リーグに属しているが、勝率は芳しくなかった。

UEA はノーリッジの郊外に位置し、ブロードと呼ばれる湖沼を望むキャンパスをもつ。近くにはリサーチ・パークと呼ばれる世界的に有名なバイオテクノロジーなどの研究所や実験施設がある。以前、本学系の事務補助員でおられた矢野敏子さんは、ご主人がこの研究所におられた5年間ほどをノーリッジで過ごされたという。出国前にお聞きしたとおり、中世からマーケット・タウンとして栄え、起伏に富んだ地形のうえに自然と調和した美しい町並みが続いていた。とくに、テント張りのマーケットは庶民的で友好的なこの町の人々のたまり場である。石畳の歩道に沿って並ぶ商店街はクリスマス前の11月からイルミネーションで飾られ、近隣から集まる多くの買い物客で賑わっている。パーミングラムから来ていた宿舎の隣人が言うには、ここは気候も人々も温和でイングランドの中でも最も住みやすい所だという。そういえば、あの院生はシャワーをめったに浴びない人だった。

## (2) UEA と CARE

63年に設立された UEA は、学際的な16の専門学部から構成され、学生数12,000名（うち4分の1が大学院生）という総合大学である。まもなく医学部も設置される予定で、大学病院を建設中だった。開発学部は本学の国際総合学類と交流提携を結んでおり、そこには日本人の留学生が100名以上も在学している。私が親しくなった博士課程院生の久野君は、障害児のリハビリが専門で、マレーシアで国際協力事業団の隊員として働き、その経験をもとに論文をまとめていた。彼の話では、博士課程は3年をめどに、1年目で理論枠をつくって修士論文とし、2年目でフィールドワークによって資料を収集し、3年目から学位論文の作成に入る計画だという。もちろん、論文提出にはそれ以上の期間を要する院生も多いが、日本の博士課程よりも集中的で系統的に指導されている印象をもった。この修士課程に属する別の院生は、日本の大学時代と比べれば「100倍は勉強している」と胸を張っていた。

私が寄留した教育学部（School of Education and Professional Development）は、96年の研究評価で第5級を得ており、アクション・リサーチ、事例研究、自伝的方法、自然的接近法、および評価法など質的な研究方法で知られている。とくに、附属施設の CARE（Centre for Applied Research in Education：教育応用研究センター）は、カリキュラム研究で著名なステンハウス（Stenhouse, L., 1927-1982）が設立し、国際的にもアクション・リサーチとプログラム・政策評価で名声を博している。

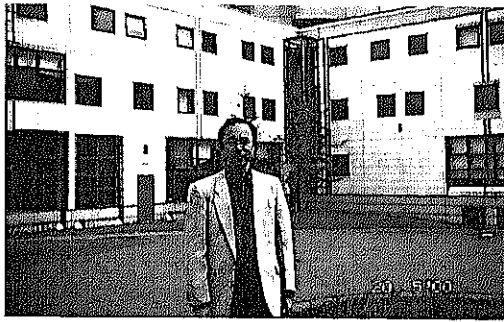
滞在中の7月下旬には、『質的研究における最新の争点』という国際カンファレンスが開催されて、内外から200名規模の研究者を集めていた。その折、カーディフ大学のアトキンソン（Atkinson, P.）やデラモント（Delamont, S.）、オープン・ユニバーシティのハムスレイ（Hammersley, M.）たちと親しく意見交換する機会を得た。著書で見知った教育社会学者たちと直にしかも寛いだパーティの席で話せたことは貴重な経験となった。



学生宿舎群と図書館（右から二番目）

## (3) 管理職・研究職・教育職・事務職・非常勤の役割分担

この大学でまず驚いたことは、職務の専門分化が明確なことである。米国方式を採っているせい、そのシステムは合理的でスタッフの専門性も総じて高い。ネクタイを締めている人物は管理職とみてよい。研究職の服装は普段着でラフなものが多い。ヤンキースの野球帽をかぶって現れる教授や、黒の同じTシャツとジーンズで通す教授の姿には驚かされたものだ。各人の任務は明確に決められてい



斬新なデザインの教育学部棟(コーナー3階が私の研究室)

る。たとえば、博士課程担当者は論文指導に専念し、学部担当者は学生との面談やレポートの採点に追われ、現職教育の担当者は夕方からの集中講義の準備に余念がなかった。研究の組織はプロジェクト型で動いており、潤沢な資金を獲得した部門は部屋数も研究補助員の数も多い。そのプロジェクトには実用性が求められる。研究者は学校教育だけでなく、妊産婦、消防士、警察官、あるいは看護職者の教育まで広く関心を広げている。このため、日本のように狭い分野領域は採っておらず、基礎分野の研究者も率先してプロジェクトに加わっていた。その理由は、彼らの多くが教職の経験をもっているからだけでなく、複数の専門分野をもっていないと研究者として生き残れないからである。

ここでは私と同年代の女性研究者が多かった。とくに、学位をもったパートタイムの研究補助員たちである。昼食会(ランチ・セミナーがよくある)の折、数少ない男性研究者に「ここでは昔からこうなのか」と尋ねたら、「以前は男性研究者の方が多かったが、ここ20年間で逆転した」そうだ。非常勤が非常に多い。同室のテレサもそうで、独りでにしゃべり出すMacにはまいったが、彼女もプロジェクトの期限が切れると、別の福祉関係の仕事に移って行った。彼女らの立ち話(至るところで始まる)は次の就職口の話題でもちきりだった。大学のリストラとはつまり非常勤の増加を意味する。週に3日、いつも質素な身なりで自転車に乗ってやって来る彼女たちの遅しさに感服した。

学部長のナイジェルは気さくなボスで、「公衆電話は高いから、私の部屋から国際電話をかけたらどうだ」とさかんに勧めてくれる。その彼が私を教員採用人事のプレゼンテーションと選考会議に招待してくれた。3人の応募者が自分の実績と採用後の計画を身振り手振りで発表し質疑があつて、その後、応募者も交えて立食のランチを一緒にするというオープンなものだった。しかし、午後に行われた内部の選考会議は随分と厳しく、結局、選ばれたのは私の予想と違う人物だった。それにしても、異邦人の私を人事の会議に同席させ観察させる懐の深さに驚いた。応募した3人は互いに顔見知りらしく、ランチが終わると笑顔を交わして傘もささずに雨の中に消えていった。次のプレゼンに向かうのだろうか。

#### (4) 大学教育とキャンパスの風景

研究室のドアは在室のとき、いつも半開きにしてある。そうすると、廊下を隔てて指導中の声が聞こえてくる。これが談笑を交えてすこぶる和やかである。しかも、指導時間は短い。多分、メールでやり取りしているのかもしれないが、それにしてもクールなものである。日本人の留学生にきけば、どこもそうらしい。たまたま彼の院生室に現れた講師を指して、「わざわざここまで出向いて来るのは彼ぐらいのものですよ」と言っていた。ここでは「介入的」指導はあまり行わない主義のようだ。このためか、自助努力が求められる。これは、留学生にとって、一般学生の3倍にも及ぶ授業料やアルバイト禁止と伴に、大きな負担だろう。留学生は英国の大学にとって「大事なお客様」である。彼らへのサービスは充実している。宿舎はもちろん、24時間の現金自動支払機(4つの銀行出張所がある)、在留手続きの窓口、無料診療所、カウンセリングや就職相談、宗教集会所、そして学生ローンの受付まである。

学内に昼間から開いているバブがあつて、しかも院生専用の部屋がある。中にはビリヤードの台が置かれ、軽いロック音楽が流れていた。私は、ビリヤードよりも広い台を使うスヌーカーの方にはま

ってしまったが、キャンパスの自由な空気は何処も同じである。ただし、日本と違うところはドラッグである。国内で禁止されているが、潜在的な使用者はかなりの数にのぼる。夜中に奇声を発する学生たちは、たいがいそうだと教えてくれた。タバコの値段は日本の3倍以上はする。校舎外につくられたスモーカーズ・コーナーは常連のたまり場で、ここで役立つ情報が得られた。また、図書館で借りた本の期限は厳しく、日本の調子で係員に謝っていたら、「ノー・プロブレム、ワン・パウンド・ブリーズ」と言われた。違法駐車をはじめとして合理的な罰金制が敷かれている。キャンパスのセキュリティ・ガードもしっかりしていて、監視カメラが到る所にあり、夜も8時を過ぎると施錠されてしまう。大学の危機管理が行き届いているようだ。

### 3. 学校と地域の様子から見た英国教育

#### (1) 学力向上政策と子どもたち

英国の「学力向上」政策は、ナショナル・カリキュラムを基準として、4つのキーステージ（7歳、11歳、14歳、16歳）ごとに到達度テストを実施し、その結果を学校間比較表（school league table）として公開することにより、競争的な環境のなかで公立学校の「底上げ」を図ろうとするものである。カリキュラムの国家基準をもたなかった英国では、70年代後半に深刻化した経済停滞を克服するための国策の一つとして、1988年教育改革法（the Education Reform Act）を制定し、子どもたちの学力水準を向上させる施策を講じてきた。97年に誕生したブレア労働党政権も基本的にこの路線を継承してきたが、これに対しては教員団体や教育学者が公教育の「自由化・市場化」路線とみなして強く反発してきた。しかし、中産階級を中心に父母や地域住民の間では、この政策を一定程度、支持する空気がある。大人たちにとって、子どもたちが少しでも勉強して、目に見える形で学力水準を上げるとは望ましいからであろう。こうした政策は米国の各州でもとられており、英米の子どもたちは「テスト地獄」に追いこまれているという報道に接することがあった。

こうしたテストによる競争が子どもたちの生活にもたらす影響はどうであろうか。私の印象では、子どもらがそれほど勉強に追われているようには見えなかった。14,5歳位までの男の子は、同年代の日本の子たちと比べて「幼い」印象を受けた。ポケモンカードを集めたり、風船突きで遊んだり、路上でスケボーに興じていた。もちろん、この印象は、ノーリッジという地方の古都のケースを中心に得たものだから、決して一般化はできない。しかし、たとえば、日本の中学生の間で見られるような、テスト慣れした妙にクールで大人びたタイプの子どもの姿に接することは少なかった。ただし、ハイティーンともなれば、自分の将来の目標をもって、図書館で必死に勉強する姿が目立つ。子どもといっても自己主張ははっきりとする。このことは、英国の子どもたちから受けた不思議な印象として、私の目に焼き付いている。それは、テストを受け止める感覚の文化的な多元性に起因しているのかもしれない。

#### (2) 総合制中等学校（コンプリヘンシブ・スクール）の様子

##### 1) 3:30pmには帰ってしまう先生たち

日本の中学校では考えられないことかもしれないが、英国の先生たちの帰校は早い。終業のベルが鳴るより早く、校門から出てくる車もある。そんなに急いで何をするのだろうか。おそらく趣味か、おしゃべりだろう。そこには部活動の指導に明け暮れる姿はない。これは考え方の違いなのか、それとも制度の違いなのか。英国の公立学校の先生たちは、日本のような終身雇用の地方公務員ではなく、公募制の被雇用者である。このことは、TES（Times Educational Supplement）のAppointment版をみてもわかる。このため、給料も年齢に対応しているわけではなく、最近、よくなってきたとはいえ、

それほど高いわけではない。組合は待遇の改善を求めているが、政府は教師の業績に照らした給与の査定をめざしている。これからは、早く帰れる先生と、そうでない先生が出てくることだろう。

## 2) ホームルームは出欠点検の場所

日本の子どもたちにとってクラスは居場所とならざるをえない場所である。英国も基本的にそうだが、もっと多様な窓口が用意されている。問題をかかえる生徒のためには「パストラル・ケア」(生活指導)を担当する教師がいるし、また、困難校では「メンター」(よき指導者)と呼ばれる地域から選ばれた常勤の相談相手もいる。教師たちが教えることだけに集中できるような体制がつくられている。ホームルームは朝と昼の出欠点検を行う場である。もちろん、担任とは接触の機会が多いが、副担任と替わったりして、固定的ではなく、授業も別編成になることが多い。教科教室制が基本なので、居場所という意味合いはうすい。何か問題が起こると、郵送による手紙で保護者と連絡をとる場合が多い。学校の電話は留守録になっていることが多かった。

## 3) 「学力向上」に努力する学校

学校は勉強する場所という考えが強い。88年に教育改革法ができてから、カリキュラムのナショナル・スタンダードが決められ、達成目標が「…ができる」という形で設定された。その達成度が先のキーステージごとに全国的にテストされる。しかも、その結果は地域別・学校別に発表される。保護者はこのリーグテーブルを参考にして、子どもの学校を選ぶ。教育の市場化と呼ばれる競争原理が導入されている。このため、各学校は成績をあげるために血眼である。学校からのお便りの1ページ目は、昨年よりどれだけ点数が上がったか、成績上位者は誰か、視学官からどう評価されたかの記事が多かった。なかには、成績不振の生徒を出席停止にしてまで、点数を上げようとする学校まであらわれたという。かつて、日本でも全国学力テストが行われたときのことを思い出させる光景である。それでも、ある夜に行われた「表彰の夕べ」では、成績優秀者だけでなく、ピアノや詩の朗読、ダンスの得意な生徒も登場して、ハレの舞台を設けていた。

## 4) タフ・スクールと労働階級

大学の隣にある中等学校は「困難校」だという噂だった。確かに、地域のリーグテーブルでは最下位に近く、ここに通う生徒の数は他校よりずっと少ない。校区はフラットの多い労働階級の住宅地の特徴を示していた。登校する生徒たちは屈託が無い様に見える。制服は男女ともズボン姿でそれほど荒れている様子もない。ただ、学業に励んでいる雰囲気には乏しかった。親しくなった日本びいきの青年ジェームス君に尋ねたことがある。「言語で出身階級が分るというが、一体、どこで聞き分けるのか」と。彼曰く、「発音を聞けば、その人がどこの地方出身で、どの階級くらいかは当てがつく」と。なるほど、ノーフォーク訛りは私でも分る。OKをオーカイと発音するからだ。一戸建てに住む中産階級の話す英語は分かりやすく、BBCのアナウンサーが話すものに近い。動作もゆったりして丁寧である。ネクタイを締めていれば、店でも「サー」と対応する。これに比べて、労働階級出身の人は身なりが質素であるが、気さくでとっつきやすい感じがする。タトゥ(刺青)を入れている人も労働階級に多い。漢字を入れるのが流行っていたが、それも誤字があつて、本人は気付いていない様子だ。男気を大事にする彼らは、力仕事の時に必ず上半身裸になる。工事で来た親方に、「こんな炎天下でなぜ裸になるのか？」ときけば、「日本人はこんなことはしないだろうな」とニヤリと笑う。案の定、翌日は日焼けで休んでいた。あれもライフスタイルの一つなのだろう。

## (3) 地域の様子

### 1) 教会とパブ

ノーリッジは西欧の中で最も教会の多い地域だという。小さなものも入れると数え切れないほどであった。教会が多いということはすなわちパブも多いということである。なぜなら、昔は教会がパブ

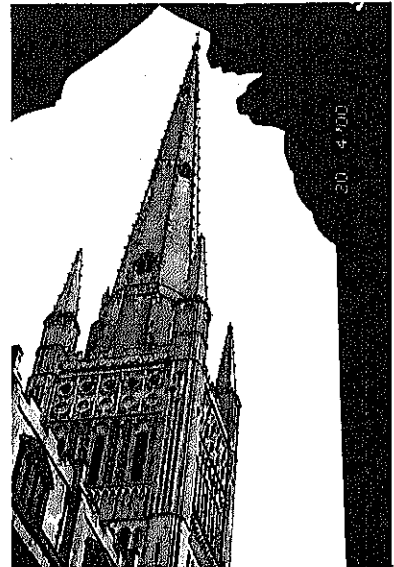
を経営していたからだ。英国最古のパブはノーリッジ大聖堂の近くにある「アダム・アンド・イヴ」である。朽ち果てそうな石造りの家屋の中にそのパブがあった。ここに30年近く住んで霊友会の活動をしておられる方からうかがった話では、この地域は英国の中でもスピリチュアルなものを尊ぶところだという。世界中を旅して回って、ここに安住の地を見つけ、今ではすっかり地域に溶け込み、座禅だけでなく、若者たちに柔道や空手などの武道も教えておられたが、オウム事件の時には、あれはカルトではないかと疑われたこともあったらしい。日本を離れて、日本仏教の素晴らしさに目覚めた方である。

近くの教会から年配の方々が布教に来ることがあった。「イエスのことを知っているか、このビデオを見てくれ、感想を聞かせてくれ、教会に話しに来ないか」と熱心に誘われた。しかし、国民の宗教離れは何処も同じで、とくに若者は日曜日に教会に行かない。このため、教会側はフリーマーケットを開いたり、アンティークショップに衣替えしたり、劇団や演奏会の会場として貸し出したりと、存続のために懸命であった。それでも、ドアが閉じられたままの教会が市内の随所にあった。うらびれた石造りの教会を見ていると、往年の祈りの声が聞こえてきそうだ。さすがに大聖堂の方は訪れる人も多く、戦死者と広島・長崎の死者を弔うレクイエムや、オルガンの演奏会、クリスマスキャロルを歌う会が催されていた。そういえば、大学の校舎内でもクリスマスキャロルを歌う会があって、音楽の先生が指揮をしていた。ケムブリッジ大学のように、キャンパス内に教会はなかったが、クリスチャンが多数を占めている。ここは英国国教会が主流だが、村の脇道を入ったところに小さなカソリック教会があったりする。映画「エリザベス」を観ると、ノーフォーク卿がカソリック派だったことが思い出される。

パブは飲むところというより、人と話すところである。ビールをチビリチビリ飲みながら、立ち話が延々と続く。私も英国中の地ビールが飲めるという「ファット・キャット」に通ったが、あの長い立ち話にはついていけずに、いつも椅子を探した。常連の客も多いが、曜日を決めてあちこちのパブを渡り歩く人もいるようだ。夜の11時に閉店するが、いきなり電気を消すのには驚く。こうしないと、家に帰らない人が多いからだろう。2000年は温暖化現象もあって、記録的な大雨が続き、各地を洪水が襲った。ニュースで見たのだが、浸水したパブで足元をアヒルが泳ぐ中、ビールをあけている男たちの様子が報じられていた。あの長い行列にせよ、とにかく我慢強い国民である。

## 2) スーパーマーケットと買い物

以前は、日曜日に開いている店はないと言われた英国だが、午後4時までは開けてよいことになった。それ以降は、コンビニが無いので、ガソリンスタンドの売店しかない。このため、閉店前のスーパーマーケットは大変な混雑である。スーパーにも少し階級差があって、中産階級向けはやや値段が高めの「ウェイト・ローズ」、労働階級向けは激安の「テスコ」という具合だ。その中間にあって、店舗を増やしているのが「セインズベリー」である。カリフォルニア米の錦、うどん、そば（これは食べられたものではない）、醤油など和食の材料がそろっているので、ここで買い物をすることが多かった。面白いのは、レジ係が椅子に座って応対することである。どの客も店員に「ハイとかハロー」と語尾上げで笑顔を見せないといけない。そうしないと邪険にされる。日本とは逆である。おかげで、笑顔作りは得意になった。スマイルは世界共通語である。どんなに気難しそうな人でも、ちょっとしたすれ



ノーリッジ大聖堂を中庭より仰ぎ見る

違い様に笑顔をくれる。これがすこぶる感じがよい。日本人は、英会話の特訓以前に、まず笑顔の特訓をやるべきである。とくに、日本の中年男性の仏頂面はいただけない。だから、買い物は店員を相手にその練習をする場である。

### 3) 目的をもって生きる若者たち

2000年の英国は好況に沸いていた。反対に日本は不況のどん底だった。その違いは繁華街の人出や活気からはっきりと感じ取られる。かつて70年代に「英国病」と呼ばれたが、90年代は「日本病」の様相である。日本版のサッチャーイズムが台頭している。英国の失業率は若年層を中心に改善されつつある。日本のフリーターのような姿はあまり見られないが、それでも若いホームレスは中心部で目立った。彼らの中には物乞いをする人もいるけれども、その多くはホームレスのミニコミ誌を大声で売っていた。こうして生活資金を得ようとする姿はさすがしい。また、彼らを援助する施設やボランティア団体もあって、それは日本よりも充実している。若者向けの職業訓練センターなどもあって、自助努力する人々に対して積極的に援助する政策が採られている。と同時に、若者の間に、将来の目標を明確にもって自己学習に励む空気が感じられる。同年代の日本の若者たちはそうした夢や希望を見失っている。これは日本社会が若者に発達・成熟課題を明示していないことも大きい。それ以上に、英国人が家庭教育において子どもに自己主張するよう促して育てることが関係しているのではない。佐藤淑子著『イギリスのいい子 日本のいい子—自己主張とがまんの教育学』（中公新書、2001年）を読むと、自己抑制の方を尊重しがちな日本の特徴が示されている。厳しい経済状況を乗り越えた英国人のプライドは、子どもに自己主張させる家庭教育の伝統から発している。ただし、最近では離婚によって母子家庭が増えており、生活保護を受けているケースも多いという。日本語を独学でマスターした先述のジェームス君の家も母子家庭だった。彼は大学進学を諦め、家計を助けるために地元の大手保険会社に勤めていた。いつか日本を再び訪れたいという夢をもって、勤務のあと日本人留学生と話し込んだり、地元の素人劇団の稽古に通っていた。あの力強さは、目的をもって生きる自信に裏打ちされている。

### 4) 合理主義の精神

罰金制で触れたように、合理主義の精神が英国人のライフスタイルを貫いている。だから、新品や高価なものにお金をつぎ込むのではなく、いかに安く中古品を手に入れたかを自慢する。「オー・イクスペンシブ」という言葉はよく聞かれる。吝嗇家の気質がなくもない。日本の感覚からすれば、それほど高価とは思えないが、彼らにとっては浪費なのだ。たとえば、散髪である。5ポンド（約1000円）でカットしてくれる店が多い。その代わり、洗髪や髭剃りのサービスはない。切った髪が顔に付いていると、ペーパータオルをよこす。何とも雑なのだが、慣れてくると、日本のサービスがいかに過剰であるかがわかる。頼んでもいないコーヒーまで値段に含まれていると、彼らは多分、怒り出すだろう。そういえば、日本の旅行を紹介する番組で、ここでは何でも「ベリー・ベリー・ベリー・イクスペンシブ」ですと繰り返していた。確かに、日本の高級ホテル内で注文するコーヒーの値段などには首を傾げたくもなる。デフレとはいっても、まだまだ内外価格差が激しすぎる。英国では17%の消費税が付いてきても、日本より物価が安いと感じることが多かった。

また、リサイクルや部屋の模様替えにも熱心で、しかも、これを自分でやってしまう。DIYの店が充実している。BBCの番組で、「チェンジング・ルーム」という視聴者の部屋を模様替えするものがあったが、中には「オー・マイ・ゴッド!」と叫びたくなる悲惨な例もあった。それでも、庭仕事を始めとして、自己流でこなす作業に喜びを見出す生活の余裕がある。「偉大なる素人」という考えもこうした合理主義の表れである。ポンコツ自動車をどう手に入れ、いかに安く再生させたかを得意げに話す。しかし、荷台にバッテリーを積んで、配線して始動させている様を見ると、これで安全なのかと不安になる<sup>20</sup>。



#### 5) 地方選挙・戸別訪問・デモ

ノーリッジの市長は労働党出身の女性だった。たまたま市議選が行われて、選挙運動を見る機会があった。各家庭の門には支持政党の旗やポスターが掲げられ、居住地区によってどの政党が支持されているかが一目でわかる。日本のような連呼はやらないが、戸別訪問が許されているので、選挙権のない私にも笑みを浮かべて、「何かお困りのことはないか」ときいて来る。「選挙権がない」と答えても、「地域のこんな問題をどう思うか」と突っ込んでくる。結局、その若い候補者は初当選を遂げたが、独りで戸別訪問して回る姿や、地域の政党ニュースを配って歩く活動は、地域にしっかりと根付いている。

タクシー運転手組合がガソリン税の増税に反対するデモを行っている光景にも出くわしたことがある。タクシーをわざと低速で走らせるので、大渋滞が起きていたが、これに抗議してクラクションを鳴らす人や、怒鳴り声をあげる人はいなかった。眉間に皺を寄せながら、別の道に回避したりしていた。中にはデモ隊に手を振る人までいて、根拠ある主張には耳を傾ける成熟した民主主義の伝統が息づいている。この増税反対運動は全英に広がって、タンクローリー組合までストを打ったために、スタンドのガソリンが払底してしまう事態まであった。売り切れのスタンドで困った顔をしていたら、どこかの親切なドライバーが「私についておいで、まだ残っているスタンドを知っているぞ」と言って、3軒も連れ回ってくれた。別れ際に、車の窓から親指を突き立て笑っていた。

#### 4. 日本への示唆

ナショナル・カリキュラムが作られる前の80年代半ばに、英国の使節団が日本の学習指導要領を調査しに来たことがある。私は名古屋大学で彼らと話す機会を得たが、その折、彼らの内の一人がこう感想をもらした。「日本のカリキュラムは確かに全国共通のスタンダードをきちんと作っていて、素晴らしいと思う。しかし、アセスメントが行われていないことが意外だった」と。彼がいうアセスメントとは学力調査のことであろう。そこで私は検定教科書と入学試験が一体となって実質的にアセスメントの役割を果たしていると説明した。けれども、彼はあまり納得していない様子だった。

88年に打ち出されたナショナル・カリキュラムでは、各キー・ステージの修了時に全国共通学力テストを行う方式が採られた。これは学習指導要領の「改良版」である。というのも、これにより英国各地でカリキュラムの達成度を客観的に把握できるからである。それは、旧文部省が行ってきた『教育課程の実施状況調査』をその精度と情報収集力において上回る。2002年1月、日本では大規模な全国学力調査が行われた。この調査は「学力低下」の真偽を確かめるためのものである。今度は日本が英国を真似た格好である。

グローバリゼーション（世界化）の波は教育の世界にも押し寄せ、中でもカリキュラムは世界中でますます同型化しつつある。「教育の自由化・市場化」政策に先鞭をつけた英国は、そうしたカリキュラム・モデルの一つとして、公教育を官僚や教師の手から消費者の手に取り戻す方向を示している。日本では品川区がこれと類似の政策を採りつつある。英国でも日本でも、教育学者の多くはこの類いの政策に批判的である。実を言えば当初、私もそうであった。しかし、英国の事例を観察するうちに、従来の学校教育の形を頑なに守り続けることに疑問を抱くようになった。「カンフル剤」が投与されなければ、学校という世界は内側から変わりにくいものである。

英国の場合、総合制中等学校が生徒の成績向上のみに熱心になる傾向は確かに見られた。しかし、それも視学官（registered inspectors）による学校評価を高めることに主眼を置いたものである。たとえば、生徒の入学時と卒業時の到達度の比較を示したり、あるいは生徒の教育要求（special needs）に如何に応えたようとしたか、その経営努力やサービス面を理解してもらうことにある。学校視察の報告書も、OFSTED（オフステッド：教育水準局）のホームページ（<http://www.ofsted.gov.uk>）で

原文のまま公開されているところが明快である。また、父母の学校参加も学校理事会（Governor）を通して積極的に行われていて、代表の選出方式や決定への参加と責任などの運営方式は、日本の学校評議員制度と大きく異なる<sup>94</sup>。ただし、生徒の参加については若干、消極的であって、たとえ参加させる場合でもオブザーバー程度に止まっていた。

このような「公開と参加」という理念による「公立学校の底上げ」政策が奏効するかどうか、その効果は長期的に見守らなければならない。2001年6月の総選挙でブレア労働党政権は圧勝した。二期目に入って、これまでの教育改革をさらに推し進めることだろう。これまでのところ、この政策は一定の効果をあげて、子どもの学力水準は確実に向上しているようである。それは、自己責任と結果を重視する教育の市場化路線の成果である。好調な経済に助けられた面もあるが、この若き指導者が掲げるビジョンは分かりやすい。経済の好況が続けば、さらに成果を上げることだろう。貧困地域や「困難校」へのきめ細かな対応を中心に、その現実主義は、日本の教育改革が参考にすべき点を多くもっている。

以上、簡単ではあるが、主観的な印象も含めて紹介した。最後に、英国の教育について調べるときに便利なホームページのアドレスを挙げておきたい。

教育雇用省 <http://www.dfes.gov.uk/>

タイムズ教育版 <http://www.tes.co.uk/>

BBC <http://www.bbc.co.uk/hi/english/education/>

#### 注

- (1) たとえば、佐久間孝正『変貌する多民族国家イギリス』明石書店、1998年。また、英国の研究者によるものでは、R. オルドリッチ著（1996）、松塚俊三／安原義仁監訳、『イギリスの教育—歴史との対話』玉川大学出版部、2001年。
- (2) こうした英国人の生活様式を辛口に評したものとして、岩野礼子『英国解体新書』中公文庫、1998年を挙げたい。これは、英国内で発行されている週刊日本語新聞「ニュースダイジェスト」に連載されたエッセイをまとめたものである。
- (3) 学校理事会制度については以下の連載論文を参照。佐貫浩「イギリスの教育と教育改革(1)～(5)」『教育』2000年9月号～2001年2月号、国土社。